

「寿岳章子先生の学問と著作、その他」

京都府立大学教授 赤瀬 信吾

皆さんこんにちは、赤瀬でございます。寿岳先生のレジュメなどを作成して懐かしゅうございました。今日は寿岳先生のお人柄などを偲びながら先生のご業績についてお話しをさせていただきたいと思います。

はじめに挙げました資料は、これは寿岳先生が亡くなられたときに鶴見俊輔先生がお書きになられたものです。『悼詞』(SURE)というご本がございましてその中からのものです。鶴見先生もとうとう昨年95歳で亡くなられてしまいましたけれども、このなかに、寿岳章子先生、寿岳文章先生、お二人の思い出が書き綴ってあります。これはなかなか面白い文章でございまして、特に生前からの先生方のおつきあいのことなどがよく出てまいります。資料には、章子先生のほうを先に挙げましたが、これは文章先生が亡くなられたときに書かれたものですので、実際には文章先生のほうが先に載っております。

このなかで非常によく触れられておりますのは、むしろ寿岳しづ先生が翻訳された、W. H. ハドソンの『はるかな国 とおい昔』という本のことです。これは、ハドソンの子ども時代、半生記を描いたもので、岩波文庫のけっこう分厚い本です。南米のラブラタ川という川の流域で育ったその思い出を綴っているもので、名訳として大変有名な本であります。鶴見先生は、このハドソンの『はるかな国 とおい昔』を読んで、戦中の重苦しい時代というものをこの本が忘れさせてくれた、一時の大変楽しい思い出をくれた、ということを書いていらっしゃいます。そのハドソンをしづ先生が翻訳なさったときのことを、文章先生も章子先生もよく語っていらっしゃいました。鶴見先生の本には、お父様の文章先生も関西学院大学で授業のときに『はるかな国 とおい昔』の原文を読んでいらっしゃったというようなことが出てまいります。いろいろな人の名前が出てきますけれども、例えば、児童文学者の庄野英二さんも関西学院で文章先生の講義を受けていたようです。庄野英二さんは、のちに帝塚山学院大学の学長さんになられる方です。終戦のころは、私の中学の先生もそうでしたが、学生が終わったらすぐに陸軍のほうにとられてしまって満州に送り込まれることがよくあったようです。満州に送り込まれて本人はわけがわからずBC級の戦犯にさせられてしまうということもあったようです。庄野先生の場合は、戦後になって帰国してからまた児童文学の世界に戻られました。『星の牧場』など非常に有名なお本がございまして。そして最後は大学の学長までなさいました。このように、この本には『はるかな国 とおい昔』のことを中心に、永く交わってこられたいろいろな方々が出てまいります。「寿岳家」という文章先生、しづ先生、章子先生がお暮らしになられた雰囲気というものが、戦中にありながら、非常に自由なものであった、明るいものであった、健康なものであった、ということが、鶴見先生の文章からもよくわかります。章子先生と鶴見先生はわりとよくお会いになっていたようで、鶴見先生は生まれは東京ですが、京都で亡くな

られました。私は子供のころに、『はるかな国 とおい昔』を読んでおりましたものですから、まさかその翻訳者の娘さんである章子先生に大学でお仕えすることになろうとは思いませんでした。私はまだ32歳で、章子先生がそのときにもう60歳くらいになってらっしゃったんだろうと思います。二年間か三年間ほどお仕えさせていただいたのですけれども、明るい雰囲気の世界でした。先生のお部屋には秘書の方が二人もいらっしゃいました。講演会などのときには、章子先生は相手の条件などは一切きかずに二つ返事でお受けになっていらっしゃいました。講演の内容も国語学というかたいものではなくて、例えば鹿児島の特攻隊基地といったところで戦時中の話などをなさっています。参考文献として挙げました『過ぎたれど去らぬ日々』（大月書店）は、章子先生の自伝です。この自伝のなかにもあったと思いますが、「あなたの一番好きな本はなんですか。」と学校の先生から聞かれて、「ハドソンの『はるかな国 とおい昔』です。」と答えたら、やはり時局柄あまり合わなかったのでしょうか、学校の先生は「えっ」という顔をなさった、ということがございました。章子先生がお若いときは、まだ女性が大学に行くとすれば東北大学しかなかった時代ですね。章子先生は東北大学へいらっしゃって、それから京都大学の大学院にいらっしゃって、そして京都府立大学へというような時代を経ていらっしゃるのですが、戦時下のことなんかも描いていらっしゃいます。実はこれ、NHKで放映されたのをご存じでしょうか〔註：NHKドラマ人間模様 つか来た道 1983年放送〕。三田寛子さんが主演なさったんですが、「三田寛子もまあまあよね」と先生おっしゃいまして、何ということ、と私は思いました。ところが、あとで章子先生の京都大学大学院のころの研究会の皆さんのお写真拝を見したんです。可愛いですね。なるほど、そういうだけのことはあるなど、可愛らしゅうございました。このように、ハドソンのお話なんかずいぶんなさっていました。寿岳家では、章子先生が子どものころから、例えば文章先生がご本をつくるということがお好きでした。あるいはまた、これはご本をつくるためにも関わってくるんでしょうけれども、紙というものの美しさ、楽しさ、というようなものをよくご存じの方で、よくそのお話などもうかがいました。この鶴見先生のご本にもありますように、やはり鶴見先生ご自身がこのハドソンの『はるかな国 とおい昔』によって勇気づけられたということが多くあったのだらうと思います。文章先生は、ウィリアム・ブレイクというイギリスの詩人の研究者、訳者です。鶴見俊輔先生がその文章先生とは三回くらいしか会ったことはないということですが、その訳業を通じていろんなことを学んだりしたということと、そしてやはり『はるかな国 とおい昔』というものによって与えられた、人間的な落ち着きといいますか、そうしたものについて述べていらっしゃいます。例えばマルキシズムの哲学者である古在由重という先生がいらっしゃいます。この古在由重先生はマルクス主義者でしたから、可愛そうなことに巣鴨〔註：巣鴨プリズンのこと。戦犯収容施設で巣鴨拘置所とも呼ばれた〕に三年ぐらつぶちこまれていた人です。たった三畳敷でも独房だから本が読める。不思議なもので、思想犯だからでしょうけれども拘置所から出されてそして刑務所へ行く途中で本を買うことができたんですね、戦時中のことですから。古在先生はその時にマルキシズムとは直接関係ないからということだと思のですが、ハドソンの『はるかな国 とおい昔』をそのとき買い求めて巣鴨へ持って行ってそこでお読みになった、ということまで書いてあります。先ほどの庄野英二さんもそのような世界のなかで育てこられた方だから、いい文章をお書きになったんだと思います。庄野英二さんには弟さんに、庄野潤三という『プールサイド小景』という小説を書いて芥川賞をもらった方がいらっしゃいます。一方、古在由重さんは古在由直（足尾鉍毒事

件の調査で有名)の息子さんです。マルキシズムの哲学者で戦前からずっと有名で戦後も長生きされて名古屋大学の哲学の教授になられた方です。ただ、戦後の共産党がうろうろと様々な権力闘争があった時代に、除籍処分を受けるなど不運な面があったということですね。古在先生は、寿岳しづ先生に宛てて、あなたのご本を読ませていただいて大変楽しかった、ということを書いていらっしゃいます。古在先生のような方々にいろんな力づけを与えたということ、それは単に寿岳しづ先生の訳がよかったからだけではなく、やはり寿岳家というものの持っていた雰囲気がいへんよかったからではないか、健康なものであったからではないか、思います。

実は、私ごとになりますけれども寿岳文章先生という名前を存じましたのは中学のときでした。資料に挙げましたが、私が中学のころに覚えた詩に、「寿岳文章訳」と出ておりますダンテの四行詩があります。ちょうど『世界の訳詩集』というのがございまして、それを読んでおりました。資料には心覚えのまま書きましたが、<花づなの かげに見しより おもはるれ 花見るごとに> そのような詩です。文章先生はたいへんすばらしい訳詩をなさる方で、ダンテの『神曲』あの三巻本の大冊をお出しになりました。あとで考えて見ればなぜ私は寿岳先生のサインをもらっておかなかったかと後悔いたしました。文章先生の時代の翻訳の方というのは、ある種の高雅な訳をお使いになるものですから、そのままではなかなか意味がとりにくいんですね。このダンテの四行詩でも非常にわかりにくい単語ですけれども、「花がつなのようにつらなっている、そのかげにあの人をはじめて見た、その人のことは花を見るごとにその人のことを思われてならない」、とそのような意味なのですが、五七調はお使いになるし、「花づな」という言葉などは普通は理解できないのではないかと思います。ダンテの『神曲』の訳も難しすぎるんですね。非常にいい高い調子で訳をなさっているのですが、古語がたくさん使われておまして、文章先生の訳されたものをもう一度翻訳しないと理解できないというところもあったりして、面白いなと思いました。まさか中学のときに翻訳の詩を拝読した、そのような先生に会えるとは思わなかったですね。文章先生がもう九十歳になられるころにお会いして、いろいろなお話をおうかがいしました。「ミキがね」とおっしゃるんですね。「ミキって誰？」とよく考えてみたら、三木清という優れた哲学者のことです。岩波文庫の設立に非常に努力をされた京都大学出身の哲学の先生で、戦時中に獄中にほうりこまれてそれで結局そのままお亡くなりになります、その方のことを「三木がね」って言える人は、世の中にそういないでしょう。それほど、柳宗悦氏なんかでもそうですけれども、交友範囲が非常に広がった先生だということがわかります。皆さんは、寿岳家にいらっしゃったことがあるかもしれませんが、本当にたくさんものをお持ちでした。初めてお宅を訪ねたときに、ガラガラガラと開けますと、こちら側のところに何気なく百万塔陀羅尼がぽっと置いてある、持って帰らんかといわんばかりに置いてあるのでびっくりしました。今日は、寿岳文章先生のこともいろいろお話したいんですけど、章子先生のお仕事についてすこしお話してみたいと思います。

寿岳章子先生のお書きになられたものを少し年代的に追ってみました。先生のご専門は基本的には「中世語」だというふうにご自身はおっしゃっています。章子先生はいろんな範囲でお勉強したり、遊んだりすることがお好きな方でしたから、大変広範囲なお仕事をなさっています。私は二、三年間、先生のお世話で助教授をやっておまして、京都府立大学を出られたあとも、抄物研究会

というものがありましたが、章子先生の持っていらっしゃった抄物は非常に膨大な量でした。その中世語に関しては資料に挙げております。私が1985年に赴任いたしますその前から章子先生の中世語の研究は拝読しておりました。先生がご退官なさるときに、先生のお手持ちの抄物を『向日庵抄物集』（清文堂出版）というかたちで出ささせていただきました。この「向日庵抄物集」についてはまたあとでお話をいたしますが、章子先生のご関心はそれ以外に、「言語生活史」、「女性とことば」、「京ことば」、と広くお勉強をすすめておられました。ご活躍なさいますのが1960年代から1990年代です、資料に挙げましたように、かなりたくさんものを書いていらっしゃいます。その一番はじめ、1960年のことですが、阪倉篤義という方がいらっしゃいました。阪倉先生には私は京都大学で学びましたが、先生がNHKのテレビでも非常にわかりやすいお話をなさる方で、立派な学者でありました。私が大学に入学いたしましたのが1971年で、いわゆる70年紛争が終わったのですが、まだその余波がございました。授業の度にヘルメットのお兄さんが現れて、「今日はクラス討議をしよう」なんて言ってましたが、今考えてみると本当に子どもの議論でしたね。子どもの夢をみるような革命の話をしていて、そんな感じがします。いま考えると、そんなことで時間が無駄になったなと感じるんですけども、それでもまあ若いときですから、そういうことがあってもよかったのでしょう。

章子先生が1960年に出されているものに、『現代のことば』（三一書房）がございました。この本の共著者の一人である阪倉篤義先生は、章子先生のお師匠筋にあたりますが、早く亡くなられて大変もったいないことでした。お家は吉田山の近くにごございましたけれども、すぐ近くに先輩が下宿をしていましたものですからその前をよく通りました。もうお一人の共著者、この方は忘れてはいけない人ですが、樺島忠夫という先生がいらっしゃいます。この先生は京都府立大学から国立国語研究所のほうに動かれた方で、いろいろなことを数量化して示す、というようなことをなさった方です。章子先生と樺島先生がいらっしゃった頃というのはひとつの黄金期みたいなもので、この御三人で書いていらっしゃるところに非常に意味があると思います。章子先生はまだ非常にお若い頃のもので、そこから先生の関心は様々な方向にひろがっていきます。

次に、『レトリック』（共文社）という本を出していらっしゃいます。この本あたりから、日本語の表現の問題、といったものを扱われるようになります。それから女性問題です。章子先生はずっと女性問題について深く関わってこられました。実際に行動としてもいろいろなことをなさって、例えば、いまの学生たちは知らないのですが、京都府立大学に「6号館」という建物がございました。この建物はもともと京都府立大学のものではなくて、もとは婦人会館でした。その京都の婦人会館の設立に一番努力をなさったのは、寿岳章子先生でした。五山の送り火が非常によく見えました。私は京都府立大学にまいります前には、愛知県立大学に五年ほど勤めていたのですが、その教え子たちが遊びにきましたときに、章子先生が「じゃあ五山の送り火を見せてあげるわよ」といって、その屋上を開放してくださったという大変楽しい思い出がございました。また、名前についても関心をお持ちで、『日本語と女』（岩波新書）、『日本人の名前』（大修館書店）という本があります。名前についてこれほど深い関心を寄せた学者はあまりいないのではないかと思うくらい、いろいろとお調べになりました。もしかしたら根底にあったのは、ご自身のお名前が「壽岳」という非常に数少ないお名前だからかもしれません。そしてもうひとつ、これは女性であるからこそなん

でしょうけれども、「暮らし」と「ことば」がどう結びついてくるかということにも大変関心を抱いておられました。もしかしたら、章子先生が中世語の研究をなさった背景にあったのは、室町時代の女性はわりと闊達なんです。狂言なんかをみておりますと、男を叱り飛ばすとか、そのような場面がたくさん出てまいりまして、これを「わわしい女」といっておりますが、このように、女性問題と関わらせるかたちで中世語というものを考えておられたのかもしれない。章子先生は狂言の方とも親しかったです。人間国宝になられた茂山千作さんと私は寿岳先生の研究室で会ったことがあります。壬生狂言にも大変興味をお持ちで、壬生寺で行われるものですが、この壬生狂言のなかに「炮烙割り」というのがございます。京都府立大学の近くの呑み屋に行きますと、もともとは「炮烙」を使っていた「炮烙焼き」というのがありますが、そこは大原の料理旅館の分館のようなところで、その炮烙焼きの存在を教えてくださいましたのも章子先生でした。

章子先生はやはり京都の人ですので、「暮らし」「女性」と同時に、「京ことば」というものについても非常に関心を持っていらっしゃいました。『はんなりほっこり』（新日本出版社）などは、やはり「京ことば」のいい本だなと思います。川端康成の『古都』という作品があります。ちょうど市電が通ったころです。京都府立植物園はもともと京都立大学の隣にあるんですけども、その府立植物園が戦後に一時期、進駐軍の上級将校たちの家になったということがあります。その後、進駐軍から返されまして再び京都府立植物園というものになるんです。この京都府立植物園になったときに、川端康成がそれをとらえて、『古都』を風景なども含めて書いてまいります。朝日新聞に連載されていました。川端は大阪の人なんですけれども、東京暮らし、鎌倉暮らしが長いですね。ですから京ことばというのがどうしてもうまくいかないというので、四条にある料亭の女将さんに直してもらってようやく本にした、ということ川端自身が本に書いています。「実はその京ことばをなおしたのはこの方なのよ。」と章子先生が連れて行って下さったことがあります。

「京都人の密かな愉しみ」というNHK番組のなかで外国人の先生が言っていたことですが、日本にはふたつの人種しかない、ひとつは京都人、ひとつは京都人以外の日本人だ、ということです。あれを見ると、私は生まれが長崎なものですから、京都の雰囲気になかなか慣れなくて、一生京都人にはなれないな、と思います。

章子先生には、やはり京都に暮らしてきた方だなどと思わせるところがありました。祇園祭のときには場所を借り切って仲間と一緒に観るということもありました。大変京都の暮らしがお好きで、とにかく何でもご本をお書きになりましたし、講演をたくさんなさいました。お書きになったエッセイを資料に挙げました。寿岳家のこと、特にしづ先生のこと書いているんですけども、わりとはやくに亡くなられたものですから、文章先生とお二人での暮らしのことを書いていらっしゃるものがございます。文章先生が亡くなられたあとに『想父記』（人文書院）という本をお書きになりました。このなかには章子先生だけではなく、文章先生の晩年におつきあいのあった、たくさんの方々寄稿されています。どれを読んでも香り高く本当に面白いものです。これを読んで、ひとつは文章先生の人柄を知り得たということはよかった、本当に大きいんですね。学識の広さというのはまるで違います。ご自身はウィリアム・ブレイクを研究され英文学の先生として教鞭をとっておられましたが、イタリア語もお読みになりました。主に19世紀のおわりに活躍したウィリアム・モリスという人は、イギリスの社会主義者でありながら豪華な本を出していましたが、このウィリアム・モリスの展覧会が京都の美術館で行われたことがありました。それは大変充実したも

ので、文章先生はモリスの記念論文集を編んでいらっしゃる。そのモリスのケルムスコット・プレスという印刷も華美なものでしたが、文章先生はどちらかというと簡素なタイプの本をお出しになります。ご自身でおつくりになるのですが、それを家族の人達が手伝うというかたちの私家版をおつくりになっています。そのなかにはイギリスの詩人の詩集もありまして、見せていただいたことがあります。本当に綺麗なんですね。章子先生が「これ古本屋で手に入れたの」と見せてくださったものがあります。印刷のときに校正をしますが、まず一回ゲラを刷ってみて誤りのところを朱で直していく、それを重ねていきます。おそらくその校正刷りの職人さんが要らないだろうと思って貰われたのでしょね、それを寿岳先生の「向日庵本」と同じような装幀でつくってみせたものでした。これはご本人に見つかってははいけませんよね。文章先生からは、本はこうあるべきなんだ、まず本を開いたらどういう状態になるべきなのか、ということをお教わったことがございました。そのようなお父様と一緒に暮らしていらっしゃるだったので、章子先生には文章先生に関する本はたくさんあります。

もうひとつエッセイ集として秀抜だなと私が思いますのは、やはり京都の暮らしについてのものです。澤田重隆という画家が絵を挿れてお書きになっています。『京都町なかの暮らし』（草思社）、『京に暮らすよろこび』（同）、『京の思い道』（同）、『湖北の光』（同）、といったものがございます、これは、湖北地方のことについての一種の思い出ばなしと紀行文が混ざり合ったような本です。例えば、「鯖そうめん」というものがあって、そこのご主人におききになるんでしょうね、つくる過程をずっと書いていらっしゃいます。どこが魅力なのかというところまで行ってみたいですね、章子先生がそういうんだったら美味しいだろうと、つい「鯖そうめん」なるものを食べに出かけて行ってしまったことがございました。

私の研究室に章子先生が持ってらっしゃった抄物をずっと抱え込んでお持ちして、ダンボール箱に六十数点あります。物凄い抄物の蒐集で感心いたしました。先生がお辞めになる年だったと思いますが、ひとつ抄物展を開いてその重要なものを並べたことがございます。その展示目録を、緑色やら黄色やらの紙でコピーを使ってつくりました。するとそれまでコピーというものをまったく信用していらしゃらなかった寿岳文章先生が、「コピーでも綺麗にできるもんだね」とおっしゃってくださったことが私は大変うれしかったんです。その展示のときに、章子先生が「雁（がん）と雁（かり）」というご講演をなさいましたが、流石にうまいものでした。いわゆる渡り鳥のことです。渡り鳥の「雁」、これを漢字で書きますけれども、「がん」と読んだり「かり」と読んだり、どうして二つの読み方があるんだろうと章子先生は興味をお持ちになりました。名前というものに非常に興味がおありだったのだと思います。たとえば、「秋に来て花を見捨てて帰る雁（かり）」というように和歌では詠みます。春には帰ってしまう「帰雁（きがん）」ですね。和歌の世界ではそういう優美な世界を「かり」と読む。それに対して「がん」と読むときは、これは食べ物としての「がん」を指すということをお教わりました。これは大変面白かった。だからお豆腐でつくる「がんもどき」、あれは雁の肉を真似てお寺さんなんかでつくる、そのようなものだったんですね。念の入ったことですが、章子先生は、宮城県の伊豆沼だったと思いますけれども、雁はそこで越冬いたします繁殖するのですが、伊豆沼の雁の保護活動に手を貸していらっしゃるということもございました。

章子先生は抄物をたくさん集めていらっしやいました。抄物はそう安くはないんですね。「抄物」というのは中国の經典ですとか、禅の教えを書いた本ですね、それをここはこうなんですよと、何々ぞ、何々ぞ、と、そういうようなものです。戦後になると抄物はけっこうたくさん出てきまして、その当時の国語学者のなかで抄物を集めるというのは、寿岳章子、私の師匠である佐竹昭広、亀井孝、というこの三人が絶対王位でした。章子先生は学会での交友も広い方でして、しかもご親切なんです。亀井孝先生には『中華若木詩抄(ちゅうかじゃくぼくししょう)』という抄物のなかでもわりと有名な、中国の詩と日本の詩について註釈を加えたものですけども、おそらくその一番古い写本じゃないかと思いますが、それをお譲りになったということもございました。章子先生の抄物を私はしばらく研究室であずかっていたということを申しました。資料に挙げていますように、二つのコレクションがあります。ひとつは、「寿岳章子双六コレクション」(京都府立大学附属図書館)ですが、どうして双六に興味をお持ちになったのかといいますと、例えば、男性の場合には最後は陸軍大将になったり、いろいろしますよね、そうしたものがあつたのに対して、女性の場合には負けると下層の女の人たちのところへ落ちてしまう、非常に女性蔑視の在り方をこの双六からも読み取ることができるということで、双六を集めはじめられたようです。もうひとつは「寿岳章子抄物コレクション」(京都大学文学部寿岳文庫)という名前でお納めされています。もうひとつ双六に関して申しますと、『双六』(共著 徳間書店)という本をお書きになるほど双六には大変興味をお持ちだったということですね。章子先生の持っていらっしやる抄物いちばんこれは絶対いいだろうなと思うようなものを集めて、先生のご退官の記念で本を出しました。それが、1987年に出した『向日庵抄物集』というものです。「向日庵(こうじつあん)」というのは、もともと寿岳文章先生がご自身でつけられた居宅の名です。先ほど申しましたように「向日庵本」を家族で造っておられました。その「向日庵」の印を貸していただいて、この本に向日庵の印を押させてもらった、そのような本もございます。この『向日庵抄物集』の「はしがき」に、章子先生は自分の関心はとにかく中世語なんだということを書いておられます。確かにそのとおりだろうと私も思います。また、「抄物」の持っている意義について木田章義さんが書いてくださいました。この『向日庵抄物集』は、写真版でその当時いちばん最高の技術だったとそのとき非常に興味したのですが、清文堂さん(清文堂出版)が本を写真で複製しました。一番さいごに私が、章子先生の持っていらっしやった抄物の目録をつくって出しましたのですが、するとなかには珍しいものがあるんですね。その珍しいもののひとつが、『燈前夜話』というものです。

資料にも挙げておりますが、『燈前夜話』を寿岳先生は二本もお持ちでした。ひとつは版本で大変面白いものでした。だいたい皆さんこの版本で読むんですけどもね。ところがそれよりも写本で大変面白いものがあった。それは何が面白いかというと、単に写しが古いというだけではなくて、竹中半兵衛の持ち物だ、ということがはっきりとわかるものなんです。秀吉の軍師ですよ。竹中半兵衛とその息子、竹中重治の二人の印が押してある。これは中国の歴史書なんですけれども、なるほどこういうものを使って勉強していたんだということがよくわかる、そのようなものでありました。非常に貴重なものだと私は思いましたが、写真版にしてしまうとあとは皆なかなか勉強してくれない、残念ながらいまはあまり使われていないようです。

そのずっとあとになりますと、フランク・ホーレー(Frank Hawley)というイギリス人の本のコレクターで、蔵書には「宝玲文庫」という印が押してあるんですが、こういった本はけっこうたく

さんあるんです。ある日、このフランク・ホーレーの旧蔵書の売立目録のようなものありまして、それを古本屋で手に入れました。そうしましたら大変面白いことに、もともとは「宝玲文庫」の印が押してあるんですから、フランク・ホーレーの持ち物であることはまず間違いないわけですが、その目録のなかにこの『燈前夜話』を見つけました。章子先生は抄物の蒐集家ですから、当然この目録を見てお買いになったのかもしれませんが。資料にその目録の表紙と裏表紙を載せておきました。（『ホーレー文庫蔵書展』東京古書會、昭和36年）そうしますと入札売立が昭和36年4月だということがわかります。そのときにおそらく寿岳先生のお手元に入ったということがわかるわけです。これはあくまでも憶測なんですけれども、このホーレー文庫、フランク・ホーレーという人の本来の研究対象は何かといいますと捕鯨です。捕鯨の歴史についていろんな文献を買って勉強した人です。ところがこのホーレー文庫の売立目録のなかでもうひとつ目立つものがありました。それは何かといいますと、紙文献です。紙についてのいろいろ古い文献がたくさん並んでいた。あ、そうかと。これに関わっているのが反町弘文堂という結構有名な本屋さんです。反町茂雄（そりまちしげお）という人がこのあと亡くなりましたけれども、たくさんの本を買って、そしてたくさんの重要な書物を送り出してくれた人でもありますし、海外に流出させた人でもあるんですけれども、なんでこんな本がストックホルム王立図書館に、と思ってよく見たら、反町さんの目録に出ていた、ということがありました。この目録の中に、先ほど申しましたように、紙文献がたくさんあるんですね。ということは何を意味しているかということ、紙について大変に詳しい、人間の立場からの接触のしかただと思うんですけれども、寿岳文章先生の『紙漉村旅日記』というのがございます。文章先生にはたくさん紙についてのご本があります。フランク・ホーレーが持っていた紙関係の文献がこの目録にたくさんあるということは、多分それを文章先生がお買いになったんだろうと思うんですね。そのときにふっと見たら抄物がある。昭和36年ですから、章子先生もお若いわけで、これなら章子にちょっと買ってあげようか、という感じで、もしかしたら文章先生が章子先生のためにお買いになったのではなかろうか、と。そのような親子の交流があったのではないかという感じもしています。それでこれをここでとりあげました。文章先生が遺された紙がたくさんありすぎて困るのよ、と章子先生がおっしゃっていたことがございます。決して日本の紙だけにかぎらず、アラビアの紙とか、そんなものまでたくさん集めていらっしゃったようです。その後、その紙文献がどうなったのかということをお私には存じませんが、またどなたか有効な使い方をして下さるといいな、と思います。

まだまだ申し上げるべきことがたくさんあると思いますけれども、ひとまず私の話はこのくらいということにしておきます。今日は寿岳章子先生の学問と作品ということで、著作をみてまいりました。もう少し深くお話ができればよかったんですけれども、一番面白い「雁（がん）と雁（かり）」の話、これはぜひお話しておきたかったものです。本当に今日はどうもありがとうございました。

（文字おこし・長野裕子）